

新たな主体形成の可能性に向けて

真 島 千恵子

さる1996年10月19日(土)、午後1時から、筑波大学第二学群B棟にて、筑波大学比較・理論文学会主催のシンポジウムが、「クィア・セオリー」をテーマとして開催された。会場となった教室への順路が、不案内な方々には分かりにくいのではと危ぶまれたが、当日の様子は大勢の参加者を迎えて活気に溢れたものとなった。このことは、このテーマの示す問題性が、並々ならぬ高い関心をもって迎えられ、あるいはそれを喚起し得たことを物語るものであろう。

三人の方による報告(その内容についてはご本人方に執筆の労を請うた)を承けて参加者から出された質問に答えて行く形で、議論は「クィア」な主体による(あるいは、における)思想的可能性について展開された。それはすなわち、「クィア」であること、そしてそれを説明し定義することへの試みを通じて、われわれのセクシュアリティと、(そこにおいてこそそれが成り立ち得ているところの)それをめぐる言説の構造を可視化する可能性を見る場を持ち得たと言うことも出来るであろう。報告者の方々によって、性的逸脱をも構造的に回収することにおいて成立しているわれわれの性別規範と異性愛イデオロギーの有り様、そしてにもかかわらずそれがさまざまに噴出している状況が示されたことから、シンポジウムの後半には話題が「強制的異性愛」へ集中して行ったことも、そのように解されよう。

既存の性差、男性性／女性性に支えられる異性愛は、男女双方に一定の役割と性的資質を割り振ることで成立している、社会的な構築物であることが指摘され、それ自身を再生産し続けようとするものとして捉えられる。そして、そこからは、男性／女性の二元的関係も「自然」であることは出来なくなる。すなわち、異性の差異の中で人間主体を形成することが、生き方の押し付けとして、生それ自体を歪める強制として見直されて行く、アイデンティティを異性愛的にのみ規制しそこからの逸脱を抑圧する故に。

したがって、かつて「認識できない領域」であったような、従来のそれとは異なる主体的形成を提示し、支配的言説に対する文化的戦略となり得ることが期待され

る、そこに「クィア・セオリー」を掲げる意味が見出されるのである。異性愛的構築が絶対多数を占める社会において、圧倒的少数に位置するそれへの抵抗がさらされて行くであろう抑圧に対して、懸念する声も上がったが、「それを一度知った後では、(その社会は)知る前に戻ることは出来ないのである」との発言に意を得た思いであったことを記して、報告の結びとしたい。